

# 末黒野

すぐろの



3月号  
(通巻919号)

## 醬油蔵

溪谷に残る夕日や冬紅葉  
寝釈迦めく山抱く寺散紅葉  
笹鳴や夕日の残る神の杉  
本堂の法鼓の洩れて花八手  
感嘆符連ぬるやうや干大根  
仁王像守る身構へや枯蠟螂  
日溜りの落葉溜りや番鳩  
プラタナスの幹の斑紋冬ざる  
醬油蔵の焼板塀や実万両  
島の入江に置き石のやう浮寝鳥  
オリーブの葉裏きらめき冬日濃し  
崖裾の窪にひと叢石露の花

森清堯

## 月冴ゆる

組み稲架に残る青さと日の匂ひ  
畦道に案山子百態コンクール  
満天星の名残りの紅葉水車小屋  
あるなしの風にぶうらり親無子  
刈株の田の面へ彩ひ散紅葉  
薄彩みの黄昏の雲枇杷の花  
花街の名残りの格子酉の市  
路地ひとつ違へて暗し酉の市  
日を纏ひ影を広げて冬木立  
古民家の軒の榎木や百の貌  
埋火や煤の匂ひの大藁屋  
鱗小波寄する岩棚月冴ゆる

岡野里子

青干菜

黒滝志麻子

(顧問)

荒壁のくづれに吊られ青干菜  
甌穴のかたへに吹かれ枯芒  
仏塔へつづく箒目冬椿  
ポケットにスマホの音や暮早し  
何もかも落とし尽くして冬木立つ  
谿深く入る冬霧や山の鳥  
白鳥の声に解かれぬ森の黙  
灯の温き白川郷や雪積る

甲矢集

浮寝鳥

石黒興平

我が目には全て金賞菊花展  
いかめしき地裁のビルや銀杏散る  
拍子木の飛び入る手締め西の市  
水鳥の水蹴つて発つしぶきかな  
舞殿の日の射すあたり雪蚩  
泣く時は思ひ切り泣け雪女郎  
雪吊や名園更に引締まり  
故郷や風強き日の干菜汁  
松影と池を分かちて浮寝鳥  
ビル陰の喫煙三人銀杏枯る

冬の虹

菅野日出子

銀杏落葉うむる参道朝詣  
点描のさまに散り敷きひめつばき  
落語家の取りの知らせや十二月  
数へ日や庖丁を研ぐ役一つ  
ペンキ屋の足場あやふしからつ風  
まなうらに残る一瞬冬の虹  
道化師の無口がよろし暮の町  
不景気の街に大きな聖樹の灯  
寒の雨寺の大樹に鳥潜み  
星従へ寒満月の耿耿と

# 小春

森清信子

ゆつたりとフェリーの進み島小春  
島の江の小さき村や小六月  
白波の島の磯へと冬茜  
冬霧や瀬戸の島々白く浮き  
養殖の浮子てらてらと小春風  
溪谷に色を散りばめ冬もみぢ  
水鳥や湖へ傾く山の影  
手に受くる霊水青み石路の花  
駆け足の湖の暮色や浮寝鳥  
リビングに赤き一鉢年用意



# 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



時

雨

今村千年

京訪へばけふも北山時雨かな  
みささぎへ続く石段の夕時雨  
いくばくか余生あるらし玉子酒  
ねむた気な猫にも言ふ寒さかな  
十二月八日の朝や波荒れて  
綿虫の舞ふや波郷の深大寺  
相模なる防人の歌・碑笹子鳴く

返り花

池乗恵美子

石路の花

大川暉美

来し方の悔いの幾つや返り花  
凧の湖を迷へる乙夜かな  
ゆるぎなき影を重ねて冬木立  
しぐるるや瓦斯灯点る港町  
木枯や郷に残せる憂ひごと  
撞木なき鐘に動かず冬の蝶  
助詞ひとつ迷うて長き夜寒かな

一点の雲なき空や照紅葉  
一隅を照らす日ざしや石路の花  
垣越しの交はす挨拶息白き  
稚笑みてかへす微笑み冬ぬくし  
寒禽の大樹震はす鋭声かな  
冬ざれの鈍色の雲動かざり  
葉牡丹や渦をまきこむ日の光

開戦日

太田良一

片仮名の葉の溜まる寒さかな  
開戦日山は松風吹くばかり  
海鳥の騒ぐ曇天開戦日  
湯豆腐の水が葉味や御師の宿  
甲板に客の出てくる日向ぼこ  
娘座より決まる席順冬座敷  
山林の叩く山道山眠る

だまこ餅

岡田史女

日表に花さし出せり姫椿  
生国に思ひを馳せてだまこ餅  
田の神の碑一つ冬田べり  
裏山に日の緊りたり石路の花  
足音の追ひこしてゆく落葉道  
延べ段の滑りやすさや冬紅葉  
さざんかの散りしく日なり友の逝く  
コンサートの余韻をいまも日短し

のつぺらば

う小田嶋野笛

立冬の薪高く積む軒端かな  
三歳と共に背負はれ千歳飴  
のつぺらぼうとなりて帰りぬ案山子揚  
寸刻の日裏日面散紅葉  
山眠る一番星を呼び起こし  
重ね着や名医を待たせ出す背中  
寝間仏間兼ねる茶の間や冬日差

煤

逃

高木邦雄

潮騒の岬の小径石路の花  
電飾の並木けぶるや小夜時雨  
夕さりの静寂の畑や枇杷の花  
ふと仰ぐ位置確かなる冬の星  
煤逃のはや夕星の家路かな  
賀状書く慶賀の一句書き添へて  
海見ゆるゆるき坂道冬薔薇

朴落葉

長尾タイ

波高し帰船に群るる冬かもめ  
望郷や石に弾める竜の玉  
蒼穹に溶け入る一枝冬桜  
花八手歩巾の揃ふ夫婦坂  
片脚の鷺の孤高や川凍つる  
けんけんぱ足裏に跳ぬる朴落葉  
ワイン酌む窓に半時寒の月



青炎集

森清

堯選



横浜 梅田 武

若武者の香りの豊か菊人形  
侘助の白の侘しき日暮れかな  
骨休み雨の勤労感謝の日  
波郷忌の茶の花深く俯けり  
向ひ家の窓の子の影聖夜の灯  
平明を旨の匂づくり冬すみれ

横浜 渡辺美智子

玻璃ごしの友を見舞ふや冬ぬくし  
首里城の復元待たる石路の花  
猫除けのペットボトルや冬日濃し  
短日や散歩途中の立ち話  
遠富士のすくと影や冬落暉  
独り居の定番とせり根深汁

藤沢 宮澤靖子

冬紅葉の中へ中へとケールルカー  
前髪へ綿虫つけて宿の子よ  
民宿のもてなしなるや干菜風呂  
風邪の子へ日差しほつこり届きけり  
丸三角四角密なるおでん鍋  
古セーター思ひ出ぎゆつと詰まりをり

大網白里 亀卦川菊枝

小春日の杖の音添ふ散歩かな  
道連れは白き昼月冬田道  
湖尻へと滑り落つる日冬桜  
のざらしの墓標のごとく蓮の骨  
冬日和生くる証の句を詠みて  
極月の夫垣間見る見舞かな

平塚 尾崎千代一

朝風呂の渡り廊下や冬の梅  
降る雪や町家灯りの京らしき  
貝塚の殻の荒みや冬日影  
イマジンを聖夜に聴ける書齋かな  
数へ日や火伏せの護符を貼り替へて  
手相見に予約を入るる師走かな

横浜 布施由岐子

小春日や坂の上より光る海  
落葉踏みゆくや雄弁なる鳥と  
防衛費上ぐる議論や開戦日  
ふるさとの香の届きけり年の暮  
白みゆく夜明けや映ゆる霧氷林  
気嵐や逆さ穂高の揺るぎなく

横浜 滝口洋子

路地奥の祠の古木銀杏散る  
化野や紅葉かつ散る無縁仏  
帯解や乙女の顔の宮参り  
冬晴の木の根の道や鞍馬山  
湯豆腐の豆の旨みや川の宿  
庭隅の仄と明るく冬桜

横浜 山崎稔子

山影の残る櫓田空真青  
迫り出して日を照り返し櫛紅葉  
新米や子らお代りと競ひをり  
衿立てて待つバス停や今朝の冬  
畝寄せの農夫一人や小六月  
谷向ひの赤き円屋根片時雨

横浜 山口 登

いづこより冬の香や露天風呂  
小春風太平洋は芒洋と  
冬麗や彩管揮ひ画く富岳  
冬麗の菊坂ぶらり一葉忌  
一合と潤目鯛の日暮かな  
寄せ鍋や出番に焦る鍋奉行

横浜 伊藤由良

残菊や限りある日の色保ち  
残菊にためらひ缺ならしけり  
日だまりを求め移るや日向ぼこ  
山茶花のあまた散り敷く小道かな  
侘助のぼとりと落ちて土点し  
この頃のいやます甘味冬野菜

# 耕 土 集 岡野 里子 選



牡蠣飯は無二の口実子を呼べり  
正直をモットーに早や十二月  
撫つる手のごつきや老ゆる咳の夫  
冬布団古りても温くし陽のほひ  
奮ひ立つ新しき句座冬うらら

横浜 岩崎 藍

自然薯掘る縄文遺跡掘る如く  
ゴム長とゴムの前掛け牡蛎を剥く  
冬うらら手押し車で其処らまで  
霜白し縄文人の煮炊跡  
二百年の藁家の土間や餅を掲ぐ

宮城 京極 久也

照紅葉山懐の湖の風  
朝まだき陣を離るる鴨一羽  
大くしやみ鬱の欠片を飛ばしけり  
月冴ゆる天を突き刺す岩の峰  
残照や骨格晒す枯巨木

横浜 鈴木 英雄

先客の銀杏落葉や空きベンチ  
靉郁と柀の花夜の路地  
短日や三つの用事まだ一つ  
乾杯に思ひを込めて忘年会  
再会の思ひをこめて賀状書く

横浜 毛利 直子

昨夜の雨光る一粒石路の花  
小さくなる苦き思ひ出冬銀河  
鉄塔の杭打ち込まれ山眠る  
冬波に挑む一羽の鷗かな  
招き猫小さく見えて大熊手

横濱 森 由佳

神妙なる今日の少女や七五三  
小春日のロビーに流れハンドベル  
中空の冬の満月赤あかと  
窓辺より離れられぬや日向ぼこ  
擦れ違ふ幼のバイバイ冬帽子

横浜 杉山くみ子

吾の庭の真中の蘇鉄霜囲  
初霜やもや立ち込むる谷戸の奥  
たわいなく笑ひ崩れて日向ぼこ  
寒暁やひかりにほつとせる窓辺  
枯尾花雲海めける風の波

横浜 白居 澄子

薄暗き貝焼小屋や九十九里  
富士見ゆるスカイウォークや谷紅葉  
三日坊主解つてゐるが日記買ふ  
目黒川の電飾桜クリスマス  
折紙のアマビエ並べ年を越し

横浜 佐々木澄子

境内を統ぶる二百や照紅葉  
朝の沼雁いつせいに飛び立ちて  
冬紅葉映ゆ鳳凰堂の水かがみ  
銀杏落葉掻き分くる婆背を丸め  
堀めぐる波紋に遊ぶ散紅葉

横浜 近藤 知子

吹き抜くる風の行方や冬木立  
冬晴や川に波紋を残す鳥  
町の灯の煌めく屋根や小夜時雨  
叢雲の流るる浜や冬の月  
寒風や肩すばめゆく畦の道

三浦 田中由紀子

節電と節力ス加へ冬来る  
丸の内の通りのアート冬うらら  
一輪の白の侘助信楽に  
恵那峡の虚無僧岩や冬ぬくし  
友逝くと知らせ届くや冬の星

横浜 玉川 利江

二条城の襖の松や冬ぬくし  
潦の番の鷺や日向ぼこ  
試みの養殖ロープ冬の湾  
停車中の車内さ迷ふ冬の蝶  
故郷や塩あんびんの配餅

横浜 平田 きみ

ヌーボーを二人で空けて星月夜  
秋晴や洗濯干して憂ひ無し  
播鉢に孫の手を借りとろろ汁  
射的屋の裸電球西の市  
登校の声それぞれや白き息

横濱 梅野 宏子

大内宿ごつごつ南瓜並べられ  
さまざまの枯葉集めて昨夜の風  
黄葉のメタセコイヤや眉の月  
道脇の枝に掛けられ黄のマフラー  
冬虹やクルーズ船の大き玻璃

横浜 平野 秀子